第212回　日文研フォーラム

■

渋沢栄一と張謇

日中近代企業家に関する一つの比較

A Comparison of Industrialists
in Modern Japan and China

Shibusawa Eiichi and Zhang Jian

■

周　見
ZHOU Jian

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター
所長　猪木武徳

● テーマ ●

渋沢栄一と張謇

日中近代企業家に関する一つの比較

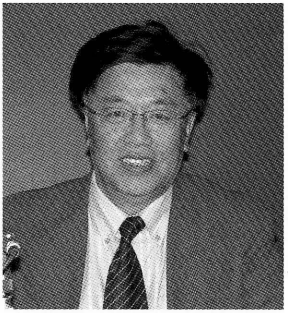
A Comparison of Industrialists in Modern Japan and China

Shibusawa Eiichi and Zhang Jian

● 発表者 ●

周　見
ZHOU Jian

中国社会科学院世界経済政治研究所 教授
Professor, Institute of World Economics and Politics, Chinese Academy of Social Sciences
国際日本文化研究センター 外国人研究員
Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies



2008年4月23日（水）

発表者紹介

周　見
ZHOU Jian
国際日本文化研究センター 外国人研究員
Visiting Research Scholar, International Research Center for Japanese Studies

略　歴

1981年８月　中国社会科学院研究生院（大学院）
　　世界経済学部日本経済専攻修士課程 修了
1981年９月　中国社会科学院日本研究所 講師
1988年４月　神戸大学経済学部 招聘外国人研究員
2002年８月　中国社会科学院世界経済政治研究所 教授
2004年11月　経済学博士（神戸大学）

著書・論文等

1．「2006-2007年日本経済形勢分析与予測」王洛林・李向阳主編『2006-2007年世界経済形勢分析与予測』社会科学文献出版社　2007年
2．「日本企業的再興之路」中国社会科学院日本研究所『日本研究』2005年５期
3．『近代中日両国企業家に関する比較研究―張謇と渋沢栄一』中国社会科学出版社　2004年
4．「郷鎮企業の経営特徴」西川博史・谷源洋・凌星光主編『中国の中小企業改革の現状と課題』日本図書センター　2003年
5．「世界滄桑巨変―百五十年」本書編集組『世界激変の百五十年』人民出版社　2002年

他多数

はじめに

十九世紀後半、侵略と拡張に走るヨーロッパ資本主義工業文明の挑戦を前に、日本と中国は相次いで、「富国強兵」の実現を目指し、ヨーロッパに学び近代化運動を繰り広げた。伝統的農業社会から近代的工業社会への歴史的変化の過程において、日本は民族的危機を克服し、「文明開化」、「富国強兵」を実現した。一方、中国では近代化の歩みは紆余曲折を経て、最終的に経済的立ち遅れや侵略によって悲惨な状況を招くことになった。同じ時期、同じ国際環境の下にありながら、日中両国の近代化の運命はなぜこのように異なるに至ったのであろう。甲午（日清）戦争後、中国では国家の安危に関心を抱く人々が、中日両国の比較を始めた。そして一世紀以上にわたり内外の学者はこの問題に対する研究を続けており、すでに豊富な研究成果を収めた。しかし、今までの成果を詳細に検討すると、中日両国の近代化に関する比較研究の領域において、未着手の多くの問題があり、近代中日両国企業家の比較研究もその一つであると言える。このため、私はここで日本の渋沢栄一と中国の張謇を代表人物として近代中日両国企業家に対し一つの比較を行ってみたいと思う。

1　なぜ渋沢栄一と張謇を近代日中企業家の代表として比較を行うのか

近代の資本主義経済における行動主体としての企業家に対し比較研究をするのは、歴史的にしても現実的にしても重要な意味があると思っていたが、では、渋沢栄一と張謇を近代日中企業家の典型的代表として取り上げたのは、主に以下の理由によってである。

（一）　渋沢栄一と張謇は、基本的に同じ時代に生きており、またよく似た社会環境の下で青年時代を過ごし、かつ企業家としての生涯を送り始めた時期も近かった。彼らは近代の中日企業者における誰もが認める代表的人物であり、それぞれの国の工業化を推し進めるうえで重要な役割を果たし、多くの偉大な業績を残した。彼らはまた、実業思想、株式会社制度の導入や普及、社会公益事業への関与等の方面において功績を残している。二人には多くの共通性があるが、また生まれ育った国による違いもある。彼らを比較することによって、我々は近代東アジアにおける企業家の形成と発展の過程や特徴に対する分析を深めることができるであろう。

（二）　渋沢栄一と張謇は、企業家活動を行なうと同時に、自伝、日記、手紙、文書、講演の原稿等の多くの貴重な資料が残されている。それらには、彼らが経験したさまざまな重要な事柄が書かれている。そのほか、親族や同僚や友人達が書いた彼らに

関する伝記や文章もまた価値あるものである。これらの貴重な資料は、われわれの研究に対して確かな根拠を提供しており、彼らの思想や行った事業を広く歴史的事実に沿って分析する際に、また彼らに対するさらに客観的かつ実証的比較を行なう際に、役に立つものである。

（三）渋沢栄一と張謇の企業家活動は、日本と中国の近代化の過程において重要な地位を占めている。このため、彼らに対する研究は中日両国の経済史・経営史研究で重視されている。しかし、残念なことに企業家史学の視角から両国の比較研究を行った成果は極めて稀であり、まだ多くの課題が残されている。このため、彼らに対する比較研究がこれからの中日両国学術交流の新しい分野になるべきではないかと考えている。

2　日本の著名な企業家—渋沢栄一

（1）企業家になる前の渋沢栄一

渋沢栄一は一八四〇年（天保一一年）二月一三日、武蔵国榛沢郡血洗島村（埼玉県大里郡豊里村）に生まれた。渋沢栄一の父は農業と藍玉の売買に従事していたが、子供の

教育にも非常に熱心で、渋沢が七歳の時には隣村の尾高新五郎（淳忠）の親族に師事させ正式な教育を受けさせた。尾高新五郎の指導の下、渋沢栄一は一〇歳までに四書五経、『左伝』、『史記』、『十八史略』を学んだだけでなく日本の歴史も学んだ。渋沢は学問を好み、両親は喜びはしたが、渋沢に儒者になって欲しいとは思わなかった。渋沢が一四歳の年、父親は渋沢に家の仕事を手伝わせ始め、折りに触れて藍の葉を採取しに連れて行く。渋沢自身も幾度となく外出し、社会の実態により多く触れる機会に恵まれたことにより、視野が広がり、意志を鍛えることができた。しかしながら、渋沢にとって、当時の社会が彼に与えるものは、往々にして受け入れがたく、かつ不平等は耐えがたいものであった。一七歳の時に渋沢が父親の代理として出席した御用金徴収の会議の際、彼は農家の出身という理由により役人の蔑視と嘲笑を受けたのである。このことは渋沢の心に深い傷跡を残した。

渋沢が少年から青年へと成長していく時期は、日本がちょうど西洋列強の脅威に直面し、国内での対立が非常に先鋭化していた時期でもあった。当時は社会情勢がひどく混乱しており、有識者の憂国意識はかつてないほど強くなっていた。渋沢は尾高新五郎の影響を受けて、二二歳の時に家業を捨て、反幕府の攘夷運動の一員となった。一八六三年、渋沢と他の数名の志士達は極めて大胆にも、武力による攘夷運動の計画を立ててい

た。しかし、計画を実行に移す前に内部で意見の対立が起こり、一時中止にせざるをえなくなった。この時、折り悪く内情を知る者が捕まってしまった。計画が漏れて身に危険が降りかかることを恐れた渋沢は、やむなく地方に身を隠した。思うにこの失敗が渋沢の初志とはまったく違う道に歩ませることになろうとは、本人も予想しえないことであったろう。彼は知人の紹介により徳川慶喜の下に降り、幕府要人の家来となった。これにより渋沢は反幕府の攘夷運動から姿を消すこととなる。

一八六五年、第十五代将軍に任命された徳川慶喜は、ほどなくして、弟の昭武を幕府の代表としてフランスのパリで開かれた万国博覧会に出席させた。この時、渋沢は昭武の随員に選ばれて欧州に渡った。フランスに滞在中、渋沢は万国博覧会に陳列されていた当時の世界で最も先進的な工業産品を参観したばかりでなく、フランス語の学習にも励み、各界との交流が広範囲にわたるにしたがって、彼は見るもの聞くもの全てにおいて日本との差は大きいと感じるようになった。例えば当時の日本では公家、武士と商人との社会的地位には天と地ほどの差があり、商人が公家や武士に会う時には頭を下げて腰をかがめなければならない。しかしフランスでは政府の官吏と商人の関係は「両者の間に少しの距りがなく、地位は全くの対等である」、「両者の接触するさまは、官尊民卑の日本人の目から見ては驚くばかり親密で、遠慮なくいろいろ議論などする」[1]というも

のである。このことが渋沢に、日本に帰ったら実業を振興させ、士農工商という古い悪習を打破しなければならないと思わせるに至ったのである。

フランスでの学習と視察が一段落した後、渋沢は再び昭武に従って欧州諸国のスイス、オランダ、ベルギー、イタリア、イギリスを訪問して回った。これらの国々で渋沢は同じように数多くの工場等を見学し、至る所で同じように見聞を広め、工業文明の力に深く感銘を受けた。とくに、昭武と共にベルギーの国王レオポルド二世に拝謁したことは、渋沢に終生忘れえない印象を残した。レオポルド二世は渋沢達にこう伝えた。「これからの世界は鉄の世界である。従って製鉄事業の盛んな国は必ず富み栄えると信ずる。又鉄を用いる事の少ない国は事実に於いて必ず弱国であり、且つ将来衰うるに至るであろうが、鉄を盛んに用うる国は必ず強く、其の国家も富むのである。……日本が将来鉄を盛んに用いるようになったなら、是非我が国の物を用いるようにせられたい。[2]」渋沢はこれにより再度思想上の啓発を受けることとなった。一国の君主でさえ貿易のことをはばからず話してくれるのであるから、商工業者がこれらの国でいかに大切にされているかがわかったのである。要するに、西洋諸国への訪問を通し、渋沢は人々の憧れの世界を見て、思想の上でも西洋文明の洗礼を受け、西洋諸国が何故強大であるのかを悟ったのである。こうして渋沢は単純な攘夷排外思想と政治主張を徹底的に放棄することとな

った。

一八六七年、戊辰戦争を経て討幕運動は決定的な勝利を収め、日本は明治新政府の設立により新しい時代へと突入して行く。欧州から帰国して後、渋沢が昭武の供をして訪欧した際に示した財務管理能力と才能は当時すでに広く評価されていたので、ほどなくして彼は明治政府の大蔵大輔大隈重信からの要請によって租税司の租税正に就任した。それ以後、辞職までの四年の間に渋沢は紙幣頭、大蔵少輔などの要職を歴任し、ほとんど全ての重大政策（貨幣制度改革、廃藩置県、国立銀行の設立、公債の発行、地租改革等）の起草と制定に関与し多大なる政治業績を挙げた。

（2）商工業界に身を投じた後の渋沢栄一

渋沢栄一は大蔵省在職中、著しい業績のために絶えず昇進をしたが、彼は財政均衡主義者であり、国家の財政は収入とにらみ合わせて支出する原則を維持しなくてはならない、といつも主張したため、一八七三年、軍費と財政予算の増加策を巡ってついに当時の大蔵卿である大久保利通と正面からぶつかったことで、官を辞して商工業に従事することを決めた。

士農工商の身分意識が依然として強い社会状況の中、要職にあり、赫々たる業績を挙

げた人物が官を捨てて商工業界に身を投じるということは確かに並大抵のことではなかった。そのゆえ、渋沢が辞官願いを出した後、何人かの友人たちは皆もう一度考え直すべきだと忠告した。しかし渋沢は彼らに感謝すると共に自分の考えを打ち明け、こう言った。「御忠告はかたじけないが、信じるところもありますから、思った通りにします。……もし人材がみな官界に集まり、働きのない者ばかりが民業にたずさわるとしたなら、どうして一国の健全な進歩発達が望めましょう。忌憚なく言うと、官吏は凡庸の者でも勤まるが、商工業者は才能ある者でなくては勤まりません。しかも現在の商工業者にはそういう人が少ない。士農工商の階級思想に引きずられて、政府の役人たることは光栄に思うが、商工業者たることには引目を感じる。この誤った考えを一掃することが急務です…。」[3]

渋沢栄一が官を辞した後に最初に行ったことは、日本が初めて行ったことでもあった。日本最初の株式会社銀行である第一国立銀行を設立したのである。ここから渋沢の華麗な企業家としての生涯が始まった。渋沢の七〇年代における企業活動は主に金融業を中心に展開された。第一国立銀行の頭取として、いくつもの想像もつかないような困難と挫折を乗り越え、経営を成功に導いた。これと同時に彼は別の仕事にも着手した。一八七三年に三井組、小野組、島田組を説得し共同出資会社である王子製紙社を設立した。

一八七五年に森有礼を援助し商法講習所を設立し、翌一八七六年一月に東京会議所会長に就任し、同五月には養育院及びガス局の事務長も担当した。さらに、一八七八年に商法会議所会頭に就き、翌一八七九年には東京海上保険会社を発起設立させた。

一〇年余りの激しい変革期を経て、十九世紀八〇年代以降になると、日本の社会と経済状況は目に見えて変化してきた。このような新しい環境の中で、渋沢の企業活動は海運、造船、鉄道、紡績、ビール、化学肥料、鉱山開発等の産業部門に全面展開を始め、新しい段階へと進むこととなる。同時に、渋沢は積極的に社会活動に携わり、日本の商工業界で最も注目を集める人物となった。彼はたびたび様々な会議、活動に参加し、各地の招きに応じ講演や指導活動を行った。その満ち溢れた精力と強い責任感から、彼はあらゆるチャンスを利用し己の実業思想と経営哲学を宣伝した。しかし、商工業界での活躍ぶりとは対照的に、渋沢は政治活動に対しては無関心な態度を取り続けた。一九〇〇年に伊藤博文は政友会を組織し、これに渋沢を参加させて党の声望を高めようと強く願ったが、渋沢はこれを拒絶した。一九〇一年、伊藤が失脚すると、伊藤は松方正義とともに井上馨に内閣を組織することを要請した。これに対し、井上馨は渋沢を大蔵大臣に任命することを条件に内閣就任を承諾した。山県有朋、伊藤博文らはこのため何度も渋沢を説得しようと動いたが、渋沢は政治のいざこざに巻き込まれるのを恐れ、結局大

蔵大臣への就任を拒否した。

一九一〇年、渋沢は齢七〇を迎えた。この年、第一銀行、東京貯蓄銀行及び銀行の集会所での職務以外、実業界での職務から一切退いた。一九一六年（大正五年）、渋沢は喜寿を迎えようとした時、年老いたことを悟り、四五年の長きに渡って務めた第一銀行の頭取を辞任し、実業界から退いた。渋沢の引退後の生活は慈善事業の継続と「論語」を再度読み解くことに費やされた。彼は一八七六年から携わってきた慈善事業に非常に熱心であり、この世を去るその時まで彼は東京養育院院長の職務を続けたのである。これと同時に、渋沢が高齢であることも省みず、「論語」の講座を開き、「論語」を人生の指南書とし、経済道徳統一論を強く主張した。片手に「論語」を携え、片手に算盤を持って実業活動をしろと呼びかけた。一九三一年一一月一一日、渋沢はこの世に永久の別れを告げた。九一年の人生の旅であった。

3　近代中国の企業家――張謇

（1）青少年時代の張謇と彼の士大夫の道

清の咸豊三年五月二五日（一八五三年七月一日）、張謇は中国江蘇省海門常楽鎮の農

家に生まれた。彼は幼い頃、家庭が比較的豊かであったことに加えて、父親が息子の大成を心から願っていたため、五歳の時には読み書きを教えられ、付近の私塾に入った。邱畏之という先生の教育を受け、一〇歳までにはすでに『千家詩』『孝経』『大学』『中庸』『論語』『孟子』『詩経』『国風』等の書籍を学び終えた。

張謇は一五歳の時から科挙を受け始めたが、当地の古い習慣によると、受験生の前三代までにおいて科挙で秀才以上の成績を修めたものが出なかった場合、その受験生は「冷籍」と呼ばれ、一定の資格もしくは地位のある者が保証人とならなければ試験を受けることは叶わなかった。そのため、張謇の父親は張謇の師である宋璞斎に周旋を頼み、資格を持っている如皋県・豊利鎮の金持ちである張駒を祖とし、名も張育才と改めさせることで、どうにか科挙の受験資格を取得させた。この後、一年の歳月も経たないうちに張謇は優秀な成績を以って院試に合格し秀才の称号を得た。しかし籍を偽って試験を受けたことはもとより違法であり、万一暴露し告発されでもしたら秀才の称号を取り消されるだけでなく、牢獄に繋がれる可能性もあったのである。そのため張駒らはこれにつけ込み、張謇の家に絶えず金銭を要求してきた。張家はなんとか耐えてきたが、要求に対処することが本当にできないところまで来ると、父親は張謇が元の籍に戻れるように宋璞斎に取り成しを頼んだ。しかし、張駒はそれでも飽き足らず役所に訴え出た。役所

はまず張謇を学宮に取り押さえ上役に報告する準備をし、秀才の称号を剥奪し罷免するつもりで牢獄に入れた。その後、幸いにも顧延卿らの友人が金銭を工面し、便宜を図ってくれたため、張謇はやっと牢獄の外に出ることができた。また、張謇の才能を愛する通州知事の孫雲錦らの斡旋により、三年が過ぎた同治一二年（一八七三年）、張謇の「改籍帰宗」は礼部の認可を受け事態はやっと一段落を告げた。

「改籍帰宗」の承認を得た後、張謇はもう二度とびくびくする必要はなく、正々堂々と科挙試験に参加した。しかし、五年にものぼる一連の騒ぎによって張家の財産は残りわずかとなっており、その経済状況は張謇がこれまでと同じように勉学に専念することを許さなかったため、張謇本人も自立して身を立てることを考え始めた。同治一三年（一八七四年）、つまり張謇が二一歳になったその年、通州知事の孫雲綿はすでに江寧の発審局に転任していたが、張謇の暮らし向きが貧しいのを慮り、自分の所の書記に張謇を招いた。その後の光緒二年（一八七六年）閏月、張謇は慶軍総領呉長慶の幕府に入り、機密書記を務めた。呉長慶の父親は孫雲綿の親友で、その人となりは度量が大きく賢者を礼遇する学者肌の将軍であったため、張謇も非常に重んじられた。呉長慶は張謇の胸に秘めた志をよく知っていたので、できるだけ様々な方面において面倒を見た。張謇はこのことをとても幸運なことだと感じた。しかし、彼のその後の科挙合格への道は順調

とは言えず、郷試にもたびたび失敗した。光緒一一年（一八八五年）の春に、張謇は都に赴き順天郷試に参加し、ついに合格し、挙人の肩書きを得た。けれどもこの後、進士に志向する張謇にとってその道は相変わらず曲折であった。光緒一二年（一八八六年）から光緒一八年（一八九二年）までの間、四回の会試を受けたが、その結果は全て思うようにはいかなかった。

光緒二〇年（一八九四年）、西太后の六十歳を祝うため、朝廷では特別に恩科なる試験が行われた。しかし、この時の張謇には科挙に受かりたいという長年の情熱がすでに消えうせてしまっていたので、試験に参加したいとは思っていなかったが、父親と兄の苦心の勧告により、仕方なく都に上り試験に参加した。この時の結果は予想の範囲を超えるもので、一次試験では六十位に入り、二次試験では十位に入った。そして四月二二日の殿試（最終試験）では一位である状元になり、その名を天下に轟かせたのである。二六年もの長きに渡って科挙に通るために奮闘してきた者にとって、本来状元になることは光栄で幸運なことであったが、この時の張謇には成功した喜びはほとんど無かった。彼はこの時のことを日記にこう記している。「門に生息する海鳥に本より鐘鼓の心（功名心）は無く、伏櫪の轅駒は久しく風塵の想いに倦む。一旦分不相応なる事をさせようと思えば、それはゆえの無い事である。[4]」一八九四年四月二四日明け方、張謇は光緒帝

に拝謁し、二五日、太和殿で儀式が厳かに行われた。朝廷の慣例に従い、新状元である張謇は翰林院修撰を授かった。

(2) 商工業界に身を投じた後の張謇

光緒二〇年（一八九四年）六月、すなわち張謇が官についてまだ二ヵ月も経過していない頃、日中間で甲午（日清）戦争が勃発した。張謇は軍機大臣である李鴻章の講和政策を激しく非難して、「戦争を以って和を求めよう」と主張したが、その時に、父親が病死したという訃報が突然届き、張謇はやむなく慣例どおりに職を離れ喪に服した。やがて甲午（日清）戦争が終結すると、清朝は日本に『馬関条約』を結ばされた。この屈辱の結果を前にして、喪に服していた張謇も己の歩む道について考え直し始めた。張謇は僅か半年にも満たない官吏生活の中で、清朝が統治者として腐敗してしまったことと、その無能さをすでに深く理解していた。国家が戦争で危機に陥っているその時に、西太后は己の還暦を祝い、天下太平を謳歌し歓楽に身を委ねていた。また、李鴻章に至ってはその弱腰きわまる外交政策のためにすでに国民の憤りを買っていたにも拘らず、相変わらず庇護、重用を受けていた。こういった状況は張謇に官吏としての前途に疑問を抱かざるを得なかった。また他方で、日本が勢いを増す中より啓発を受け、商工業が国

家繁栄の原動力であることを目の当たりにした。こうして、張謇は官を辞して商工業に従事しようと決心した。

張謇の実業活動は最初、紗廠の設立から始まったのである。これは、南通が中外に有名な綿花の産地であり、かつ自家製布の生産もすでに発展し、労働力が豊富、交通も便利であり、立地条件が非常に優れているからである。一八九六年二月、紗廠の創設の件に関する報告は正式に朝廷に認可されたため、紗廠の資金の募集活動はそれで序幕を開いたのである。しかし、資金の募集活動は想像したより困難であり、曲折の連続であった。まず、張謇がその後で「通州の地は風気また開けず…」と話したように、資金力のある人は少なかった。張謇本人も金持ちではなく、持っているのは状元という肩書きだけである。資金力のある人から見れば、四書五経を読んだ文人はただ空論だけを重んじ、実務の能力がないため、その企業設立に疑いの態度を持たざるをえない。また、最初は何人かの上海商人が張謇に協力し半分ぐらいの資本金の応募を約束したが、その後の上海の綿糸市場に不景気の兆しが出てきて、幾つかの紗廠が相次いで難局に陥り、紗廠の前途に不安を生じたため、最終的に約束を破ることになった。しかし、張謇はこれらの当初思いもつかなかった状況に直面しても、けっしてその意気は挫けなかった。彼はあらゆる労苦を厭わず、万難を克服し、四年もの歳月をかけて二万錘余りもの紡績機を擁

する紡績工場を完成した。その後、張謇は「天地之大徳曰生」という儒家の名言中の大と生二字を取って大生紗廠と命名した。

一八九九年、大生紗廠が操業を始めた時、あいにく中国民族紡績工業は「綿貴紗賤」という現象の影響を受けてまさに衰退状態に陥った時期に当たっていた。綿貴紗賤というのは綿花価格の上昇と綿紗価格の下落が同時に発生することを指す。張謇は市場のこの実際状況に応じて、「当地生産と当地販売」経営方針と有効な市場対策を制定した。いわゆる「当地生産と当地販売」というのは、当地の有利な地理と社会条件を十分に利用し、綿花資源の競争と粗紗の販売には勝機を取ることだ。このため、張謇は綿花購入のネットワークの建設に力を入れ、安定した仕入れ先を確保すると同時に、市場調査と市場変化による綿花購入策略の調整を通じて出来るだけ原料コストを削減する。一方、当地の自家製の粗布生産の需要に応じて、粗紗を主とする製品戦略を実施する同時に、薄利で販売する方針を堅持し、地方の商人たちとの密接な個人関係を大生紗廠の販売ネットワークに活かした。この「当地生産と当地販売」経営方針のお陰で、大生紗廠は大変厳しい環境の中でしっかり第一歩を踏み出して大きな成功を収めた。緒戦に勝利を収めた張謇は非常に励まされ、各領域に事業を拡大展開し始めた。一九〇〇年には通、海の州境一帯で通海墾牧会社を設立し、その後、三〇余りの各種企業を相次いで設立し、

僅か何年かの間に大きな企業グループを作り上げた。

一九〇三年初頭、日本の在江寧領事官である天野はすでに中国実業界で有名な人物となっていた張謇に、日本に赴いて第五回国内勧業博覧会を見学するよう要請した。張謇は明治維新後の日本経済が飛躍的に進歩発展していることをすでに耳にしていたので、すさまじい勢いで躍進する東方の隣国を自ら視察してみたいとずっと考えていた。それゆえ、張謇はこの機会を捉えて訪日し、六三日間の訪日期間中に、長崎、神戸、大阪、名古屋、京都、東京、横浜、青森、札幌等二〇余りの大、中都市に行き、三〇件に上る農工商企業や団体、さらに三五ヵ所の学校と教育機関を訪問した。彼は苦労も厭わず、その日に見聞したもの、またその日に会得したことをできるだけ細かく記し、自分に感銘を与えてくれたことを次のように書いた。日本は「維新変法を行なって三〇余年、教育、実業、政治、法律、軍政等一心に欧米を模倣し、朝野上下たゆまずに心と力を尽して欧米に追いつこうと励んでいる。その用意の最も適当なるのは上がまず方針を定め、下に大義を明らかにすることだ。」[5] さらに、これこそが日本が成功を収めることができた貴重な経験であり、中国がまず初めに学習し、見習わなければならない点であると考えた。張謇はまた、日本が国民の教育に力を入れ、民度を向上させたことに極めて感心し、日本の教育が成功した点は「一億人に普通の知識を求め、幾人ばかりかの非凡を求

めず」という考えにあり、「強い国とは兵の強弱ではなく教育の程度で決まる」[6]のであると考えた。このように、僅か六三日ばかりの視察の中で、張謇はかつてない啓発を受け、視野を広げ、中国が直面する問題を改めて観察分析し認識することとなった。

戊戌変法の失敗後、張謇の政治に対する態度はすでに比較的冷ややかであり、ただ実業に専念したいとの一心で人々の利益になることだけをしていた。しかし心の奥底では依然として中国が立憲君主制になることによって社会の変革を実現させることを願っていた。二十世紀に入り、腐敗しきっていた清朝が国内外の強い圧力に押される形で改革に応じる姿勢を示すと、中国で立憲君主制を実現させたいと願う張謇の前に一筋の希望が灯り始めた。特に日本での視察が張謇に大きな刺激を与え、彼に改めて中国の政治変革問題に関心を持たせることとなった。一九〇四年、張謇は両江総督である張之洞のために『立憲奏稿』を起草し、立憲制にしなければ中国の存在と復興は有り得ないということを論じた。さらに張謇は『日本憲法義解』、『議会史』等の小冊子を印刷し朝廷重臣に配付した。立憲制の内容について、張謇は日本のそれを真似しようとしてこのように主張した。「中日両国は比較的近いので、日本を模倣するべきである。日本はドイツから学び、英国を参考にしており、ドイツ、英国からも同時に学ぶべきである。仏蘭西、米国を模倣するのとは違う、その意図するところを観察するのみである。」[7]光緒三二年

（一九〇六年）七月、清朝から立憲制を立てる準備をするように詔が下り、張謇は鄭孝胥、湯寿潜らと共に上海で立憲準備公会を誕生させ、彼はそこの副会長に推挙された。立憲準備公会は政治方面に活動の重点を置いた以外にも、諮問局を置くことや、国会請願運動において少なからず役割を果たした。一九〇八年、西太后と光緒帝が崩御すると、三歳にも満たない溥儀が帝位を継承した。清朝は政局の安定を図るため、各省に立憲政治を準備し実施するための諮問局を設置し、張謇を江蘇省の諮問局局長に任命した。

辛亥革命が成功を収めると、張謇は実業方面での業績と社会的名声により政権者の重用を受けた。一九一二年元旦、孫中山（孫文）が臨時大総統の職に就くと、張謇を実業総長兼両淮（淮北、淮南）の塩政総理に任命した。しかし、僅か一ヵ月余りが過ぎた頃、臨時政府が漢冶萍会社を抵当に入れて日本に借金を申し込んだことが納得できなかったため、張謇は実業総長の職務を辞した。袁世凱が大総統に就任すると、彼と良友である熊希齢の度重なる説得を受け、一九一三年一〇月に熊希齢内閣に参加し、農商総長を務めた。その在任三年の間、張謇は経済関係の法律の制定を非常に重視した。彼は商工業の発展を保護するとともに、金融体系の整頓に積極的に着手し、中央銀行と地方銀行を建設し、商工業の発展と輸出を促進する一連の税金政策や方針を制定した。中国経済をいち早く正しい軌道に乗せるため、張謇は全ての心血と力をこれらに注いだのである。

しかし、中国の政治情勢の変化がまたもや彼に大きな精神的打撃を与えた。彼は支持してきた袁世凱が政治を弄び、国を盗むようなペテン師だとは思いもしなかったのである。張謇はどうしても我慢することができず、封建制度を復活させた袁世凱に対する怒りを示すため、一九一五年三月、職を辞し故郷に帰って行った。

張謇は政治の表舞台から退きはしたが、依然として国家の行く末を案じていた。この時の張謇はすでに還暦を過ぎていたが、その雄々しい志は依然として健在で、故郷に帰った後も紡績業と墾牧事業の拡大にいっそう力を入れると共に、いくつもの新事業を完成させていった。一九一六年に天生港果園を設立すると、一九一七年には郊外の道路を整備し、東南西北中の五つの公園を造り、一九一八年に大同銭庄と南通不動産会社を設立した。一九一九年には伶工学社（当時中国で唯一の演劇養成学校）を創立し、更俗劇場を建設した。また同年、淮海事業銀行を創設し、工商業補習学校、蚕桑講習所、女紅教習所を設立して、南通図書館の新館も建設した。一九二二年、第三養老院を建設した。一九二三年、地方の道路を整備し、自ら全県の水利計画を立てた。しかし、残念なことは、本業の紡績業及び墾牧事業の拡大はあまりにも急激すぎ、さらに二〇年代に入ると、市場環境は劇的に悪化し、収益の激減による債務返済の危機に陥った。このため、張謇は外資の利用を思い付き、日本とアメリカの関係者に資金の協力を打診したが、いずれ

も期待通りには実現しなかった。こうして、一九二五年までに、張謇はついに大生企業グループの再建を断念し、大生紗廠ごとを上海の中国銀行、交通銀行などの金融機関からなる債権者団に譲り渡した。

張謇は大生企業グループの失敗で企業家の生涯を閉じたのである。けれども、その後の張謇はあいかわらず多忙の毎日を送っていた。彼はいくつもの社会団体でも職務に就いた。一例をあげれば、中国紡績工場協会の会長、中国技師学会並びに中国鉱業学会の名誉会長等である。付言すれば、張謇は中国の水利建設を大いに重視しており、一九二二年から、新運河の工事監督を兼任し、高齢であるにも拘らず、度々各地の水利資源と工事状況の視察に出かけた。一九二六年八月初旬、すでに体の状態が思わしくない事を感じていたが、張謇は酷暑の中、長江沿岸の堤防工事を視察し、その結果働き過ぎが祟ったのか病状を重くし、同二四日に永遠の眠りに就いた。享年七三歳であった。

4　渋沢栄一と張謇の経歴と近代日中社会

以上、我々は渋沢栄一と張謇の主な経歴を見てきたが、かりに歴史人物の研究という観点から見ても、この考察は極めて概括的なものであったと言える。だが、われわれは

時代と社会の変遷の痕跡が両者の経歴のいたるところに残されているということを見て取ることができよう。渋沢栄一が生きた九一年間で、日本は江戸、明治、大正、昭和と四つの時代を過ごし、いくつもの大きな社会の変革と歴史的出来事を経験した。また、張謇が生きた七三年間で、中国は列強の侵略を受け民族の存続危機が絶えず深まっていった一方で、二千年もの長きにわたった封建時代が終結し、伝統社会から現代社会への転換を迎えた。このような共通点のある時代背景の下、両者の人生には非常に似通った部分が存在する一方、いくつかの相違点の存在も見受けられる。では、その共通点と相違点はどのようなものであろうか。また、そこからどのような問題点を見つけることができるのであろうか。

（1）渋沢栄一の「早年出仕」と張謇の「大器晩成」

上述したように、少年時代の二人の境遇には確かに似通った部分が存在している。彼らは共に農家の出身で、幼少の頃より私塾で教育を受け、四書五経を学び、受けた啓蒙教育も内容の上では基本的に同じであった。両者とも農民出身であったために、若い頃には虐げられた経験をもち、そのため自身の社会的地位を変えることを常に夢見ていた。しかし、両者のその後の経歴は大きく異なる。渋沢栄一は自分の境遇を変えるため攘夷

の旗を掲げ倒幕を目指そうとし、逆に張謇は朝廷に叛こうなどとは考えもしなかった。そして、渋沢は一五代将軍徳川慶喜を頼ることで、武士階級となり、二八歳の時、明治の新政府で大蔵省の高官に就いた。これに対し、張謇は最後まで初志を貫徹し、科挙を通り出仕するために二六年もの間奮闘を続け、不惑の年で大望を果たした。この相違点は両者が直面したそれぞれの社会、現実を如実に反映するものであった。

江戸時代末期、日本の官僚制度は依然として世襲制と門閥制を続けていた。このような制度は社会での地位を変えることを願う人々に二つの道しか選ばせなかった。一つ目の道はこのような制度を変えるために攘夷倒幕に参加することであり、もう一つの道は籍を変え、名を改めて幕府か藩に仕えることであった。渋沢も例外ではなく、当初一つ目の道を歩み、それに敗れた後はもう一つの道を歩んだ。この二つの道はそれぞれ違う政治的意義を持っていたが、一人の人間にとってはどちらの道も自身の社会的地位を改善するためにやむなく選んだ道であったと言える。しかし、明治維新後の渋沢はとても幸運であった。資本主義社会への変革が起こり、身分差別が廃止され、能力主義の社会原理がだんだんと出来上がって来たのである。新政府は人材を採用するにあたってこだわりを持たず、渋沢が旧幕府の家臣であったことなど気にもしなかった、これにより、渋沢はその才能を思う存分に発揮し、青年期から国のために尽力する事ができたのである。

しかしながら、科挙制度が行われていた中国において、張謇の直面したものはそれとは違う社会と現実であった。科挙制度は世襲制度とも門閥制度とも違い、能力主義の色合いが強いものであった。このような制度の下では、たとえ貧しい農家の出身であっても、殿試に合格さえしてしまえば国家の最高級の官僚になる条件を手に入れることができる。この点では、張謇は渋沢栄一と比べ幸運であったと言える。なぜならば、このような制度の存在は他人から差別されてしまうような社会的地位を自らの力によって変えることが出来るからであり、渋沢のように反逆の道を歩む必要もなかったからである。こうして見ると、封建社会の下では科挙制度は世襲制度や門閥制度と比べてより合理的であり、世襲制度や門閥制度にはない社会的包容力と機能が備わっていたと言える。ここで言う社会的包容力と機能とは主に次の三点で表される。第一は、全国の各階層から人材を集め、見識のある者を起用し、能力のある者を政治に参加させるという点である。第二は、すべての人々に向けて官僚になる道を開き、能力のある者たちに己の運命を変え己の大望を実現させたいという理想を一つの試験に託させ、他の手段を用いて差別を受けるような社会地位を変える必要を感じさせない点である。第三は、社会伝統の倫理道徳観念に符合するという特徴によりすべての人々から科挙は正道であるということが公認されているという点である。以上三点から科挙制度の持つ社会的包容力が非常に大

きく、それは統治者と被統治者の間における衝突と矛盾を緩和する機能がある。しかし、もう一つの視角から見れば、科挙制度の持つ社会的包容力は中国封建制度が長く続けられる一因であったと言える。この制度のもとで、多くの優秀な人材は進士試験に熱中し、合格までの長い年月の間その才能は社会に何も役立たないので、人材の巨大な浪費をもたらした。張謇のいわゆる大器晩成はまさにその最たる例証である。

（2）渋沢栄一と張謇の辞職と経営ナショナリズム

身分の差があり、商人を軽んじる意識が強い社会の中で、渋沢栄一と張謇が官を捨てて商工業界に身を投じたことは封建社会の世俗が持つ偏見に対する大胆な挑戦であった。彼らが官を捨てた直接の原因から見てみると、渋沢栄一は仕事の上での意見の相違とそれに伴う不満であることに対して、張謇のそれは統治者の腐敗と無能さに対する失望と不満であった。政治的な意味は同じというわけでもなかった。しかし、なぜ商工業界に身を投じたのかという点では、両者は似たような理由を持っていただけでなく、思想上の特徴にも共通性があったのである。

まず始めに、彼らが実業界に身を投じた時の時代背景と動機が同じであるということがあげられる。すなわち、彼らは個人もしくは家庭の繁栄や富貴を求めたためではなく、

祖国を救い、強くするために商業に従事したのであった。渋沢はこう言った。「欧米諸邦が当時の如き隆昌を致したのは、全く商工業の発達しているゆえんである、日本も現状のままを維持するだけでは、いつの世か彼等と比肩し得るの時代が来よう、国家の為に商工業の発達を図りたい、という考えが起こって、ここに初めて実業界の人となろうとの決心が着いたのであった。[8]」また、張謇はこのように言っている。「かりに工業が興らなければ、何時までたっても国家に不貧の期は無く、民は永遠に不困の望がない。中国はただ工芸の一端を善くするのみで、日に日にそれが向上し、一体どのように憂貧の事に至るのか。これすなわち養民の大経であり、富国の妙術であり、外国の侮りに抵抗するためだけに工業勃興を計るのではなく、外国への抵抗というものは自ずとその中（工業勃興の中）にあるものである。[9]」このように、彼らの国を富ませたいという気持ちは明らかであり、商工業を興さなければならないという認識も明確に一致している。ここからわかるように、渋沢と張謇は愛国心と社会的責任感に満ちている人物であり、彼らが商業に従事したことは完全に国家の事を思い、国家の急を考えての行動であり、個人の得失など度外視したものであった。このため、彼らは極めて似ている実業思想を持っている。渋沢は論語算盤説を提出し、経済と道徳の合一、公益と私利の合一、義と利の合一を強く主張し、実業界に国益優先を呼びかけた。一方、張謇は「言商仍向儒（商名

儒行）」という理念を提出し、「非私而私也、非利而利也（私にあらざるも私となり、利とあらざるも利となる）」[10]という思想を主張した。つまり企業家にとって企業を経営するにはまず国家のための思想を樹立し、国家の急を急するべきであり、私利の追求を主要目的においてはならず、最終結果から見てそのようにすることが客観的には自己にとって有益であり、私利を謀ることなくして私利を得るという効果を収めることができるのである。明らかのように、渋沢と張謇は共に儒学思想の忠実な擁護者であり、共に儒学思想とその倫理観を企業活動の精神的支柱とし、西洋資本主義の経営方法でこれを補完するという経営ナショナリズムの鼓吹者と実践者であり、彼らは共に東洋の精神文明と西洋の物質文明との結合を探求する過程で近代企業家への変身を遂げるのである。

（3）渋沢栄一の訪欧と張謇の訪日

言うなればそれは或いは近代の歴史の流れの中で起きた一種の必然であったのかもしれない。西洋文明がその抗いようの無い勢いを以って全世界を席巻し、後発国が民族独立と「自立」を求めている中で現れた歴史人物にとって、先進国を訪問した経験は往々にして彼らの人生における新しいスタートラインとなるものである。渋沢栄一と張謇はその機会に恵まれ、彼らの訪問はやはりその後の人生と信念とに多大なる影響を及ぼし

た。渋沢は欧州訪問を通して、日本で株式制度を普及させることを目指し、自らの行動を以って身分差別のある封建的意識を改善させようと決心した。張謇は日本訪問を通して、政府の助けが商工業の発展と社会改革を行うことにとって切実な事であると深く感じ、地方自治の道を歩むことを心に決めた。彼らのように伝統社会で生まれ育った者にとって、もしそのような思想的洗礼を受けることがなかったならば、彼らのその後の人生と企業家としての活動はまた違った様相を呈していたのかもしれない。

しかしながら、比較という観点から見ると、渋沢栄一と張謇の訪問にはいくつかの明らかな相違点があることにも注意しなければならない。まず、時間的な側面から見ると、張謇と比べて渋沢は幸運であった。初めて欧州に渡ったのは彼が二七歳の時であった。彼の思想上の未成熟さは、彼が新しいことを受け入れる大きな余地を残していた。また、さらに重要なことは、この時の訪問期間は二年近くにも及んでいたことである。これほどの長い時間は、渋沢に語学をマスターさせただけでなく、その国の生活に深く関わらせられることとなり、欧州視察をより充実したものにさせることとなった。逆に、張謇の日本での視察は僅か二ヵ月間であった。このような短い時間では、彼がまったく新しい国家と社会を理解するには明らかに不十分である。また、視察対象から見ても、渋沢が渡ったのは近代資本主義と産業革命の発祥地である欧州の6カ国であり、その中には

当時世界で最も発展していた工業国のイギリスも含まれていた。それゆえ、渋沢が見たものは伝統社会とは正反対の近代社会であり、工業化と西洋の精神文明に彼は洗礼されざるをえなかった。他方、二〇世紀初頭の日本は三〇年余りの奮闘により、「後れた国」というイメージを振り払い、帝国主義列強の一員と成っていたが、西欧の資本主義国家と比べてはまだ確かな差があり、伝統社会の痕跡をどことなく残していた。このため、張謇が日本で見たものは近代国家にまだ完全には生まれ変われていない社会であり、これは張謇の近代社会への理解に大きな制限を加えざるを得なかった。このほか、張謇が日本に行ったのは彼が五〇歳の時であり、長きに渡る科挙の道と紡績工場を設立する苦労を経験していた彼の思想はすでに成熟していた。このことは日本での視察で新しいものを吸収しようという張謇にとって、有利な点もあり、また不利な点でもあった。これらからわかるように、訪問した先進国の違いが、渋沢栄一と張謇の近代工業化に対しての認識に差を生み、この差が彼らのその企業活動にそれぞれ違った影響を及ぼしたのである。

（4）渋沢栄一と張謇の政治に対する姿勢

渋沢栄一と張謇の経歴からよくわかるように、両者が官を辞して商工業に従事した後

の政治参加姿勢には明らかな違いがある。渋沢は実業活動に専念し続け、官界に戻ることはなかった。彼の企業活動は政府官僚と密接な関係を保っていたが、いかなる政党にも参加せず、明治以後の政治界にはいかなる足跡をも残さなかった。これに対して張謇は終始政治活動を放棄しなかった。こういった事情が、彼に著名な企業家としてだけではなく、近代中国政治で重要な地位を占めさせることとなった。それでは、それぞれの国で最も代表的な企業家である渋沢と張謇の政治に対する姿勢になぜこのような大きな差が生まれてしまったのであろうか。個人の経歴と社会の環境、この二点からその答を導き出してみたい。

個人の経歴から見てみよう、前文でも触れたように、渋沢栄一は少年時代から人並み優れた商才を発揮してきたが、政治にまったく関心がないわけではなかった。彼が反逆の旗を掲げ倒幕運動に参加したことがこれを証明している。しかしながら、その後幕臣となった変節行為によって、彼は社会変革に相対する立場に身を置く一方で、時代後れというイメージを人々に与えた。そして、彼自身にも政治に関与することは良くないという教訓を与え、政治は個人に左右出来るような簡単なものではないと感じさせることとなった。渋沢栄一はつぎのように言っている。「元来政治と実業とは互いに交渉錯綜せるものであるから、達識非凡の人であったら、この二途に立ってその中間を巧妙に歩

めばすこぶる面白いのであるが、余の如き凡人がさようの仕方に出るときは、あるいはその歩も誤って失敗に終ることがないとも限らない。故に余は初めから自己の力量の及ばぬところとして政治界を断念し、もっぱら実業界に身を投じようと覚悟した訳であった…。」[11] この発言はこの教訓に対する彼の消極的な総括であると言える。一方、張謇は政治生活において教訓や挫折がなかったわけではなかったが、清朝の腐敗と愚昧さを前に、深い失望感を覚え商工業界に身を投じた過程自体に、政治に対するその消極的な態度が反映されていたといえる。しかし、張謇はまがりなりにも二六年の歳月を科挙に費やした知識人であり、儒家思想を以って天下を安定させるという考え方が骨の髄まで沁み込んでしまっていたことも確かであった。これは政治とは無縁ではいられない、また政治の世界からは離れられないことが彼に運命づけられていたといえる。

次に、社会環境の観点を見てみよう。明治維新後の日本は、一連の改革を経て資本主義制度が確立しており、明治政府の殖産興業政策の実施及び個人企業に対する援助は、企業が発展する上で非常に有利な社会的条件を作り出していた。政界では情勢が変わることもしばしばで、派閥争いも絶えず起こってはいたが、資本主義の路線を歩むという基本方針が変わることはなかった。そのため、企業の発展過程において国の制度からの妨害や干渉は起こらなかった。このような背景の下、どの政党が政権を握っても、彼ら

は商工業界からの声に耳を傾けたし、企業家とは常に密接な関係を保っていた。渋沢はこれにより商工業界の経済利益が政治に反映されないことを心配する必要がなかった。

一方、中国の状況はこれとは完全に異なるものであった。洋務運動を何十年も続けていたとはいえ、封建社会制度には何の変化も見られず、これは張謇の企業活動を異常なほど困難なものとした。このような過酷な現実は張謇に「実業の命脈は全て政治に関わっている」[12]ことを悟らせざるを得なかった。そして自分が惹かれていた実業を以って国を救うという考えは、制度の上での有力な支持が得られなければ目的を達するのは困難であり、中国の政治制度の変革は個人による実業救国よりもさらに重要であると考えるに至った。こうした政治に対する意識や姿勢は大部分において彼が直面した社会環境によって形成されたものであり、それは彼が渋沢とは違って政治の世界から離れることが出来ない大きな原因となっていたのである。

(5) 企業活動の成否と社会環境

渋沢栄一と張謇は同じ実業救国の理念を抱いて商工業に身を投じたものであったが、しかし両者の人生はまったく異なる結末となった。渋沢は望み通りに日本の富国強兵を見ただけではなく、自分の事業の成功も収めた。これに対して、張謇の目に映った中国

は相変わらずの貧困と後進に苦しみ、万難を排して創設した大生企業グループもついに失敗に終わった。それでは、大生企業グループはどのように繁栄から没落に陥ったのか。言うまでもなく、どの国にも企業家の経営活動の失敗はかならず個人的な要因がある。張謇の場合は主に二つが取り上げられる。その一つは近代企業管理知識の不足、もう一つは近代企業経営意識の欠如である。例えば、張謇は「機械と工廠の建物において、減価償却という例がある。…しかし『旧』くなっていないうちに、『折』（減価償却）をやらなくてもいい。これも『折旧』（減価償却）という言葉そのものと名実相伴う」[13]と述べていた。明らかに、張謇の頭の中で機械設備を定期的に更新する観念がなく、減価償却を通じて、資本の蓄積を促したり、機械設備の価値の下落を防止したりするような意識もなかったのである。それゆえ、減価償却を企業経営においては採用すべき基本的な制度の一つと見なすことができなかったのである。

しかし、大生企業グループの破産の経緯から見れば、張謇の失敗はただ個人的な要因によるものではなく、あくまで中国の社会環境と政府の政策に大きな関連があると言える。つまり、大生企業グループが窮境に追い込まれた時、困難を乗り越えるために、途方に暮れた張謇は政府に緊急の資金援助を請求した。しかし、この時でさえ政府は依然として傍観し何も助けてくれなかった。ところが、偶然の一致であるかもしれないが、

二〇年代の初めの日本経済も一時恐慌を生じた。第一次大戦後、日本の経済は再び繁栄して、企業の投資も非常に増加し、生産量も大幅に高まった。しかしこれらは生産過剰と信用関係の急激な膨張を招き、ついに金融危機と不景気を突然もたらした。信用関係の破壊と株価、物価の大幅な暴落により、金融機関と紡織などの企業はかなり深刻な打撃を受けた。しかし日本政府はその情勢に歯止めをかけるために、大規模な緊急救助措置をとった。これらの資金援助などの緊急な措置の実行は主要な商業銀行と株式取引所及び大企業を一時の苦しい境遇から救い出し、金融の恐慌を克服し、景気の大幅な悪化を防ぐのに大きな役割を果たした。中日両国のこの対照的な政策に直面して、張謇は非常に感傷的になり、彼は「中国の政府ははるかに日本に及ばない。南通の各事業は今中断時期にある。私はこの不況をそのまま放置しておけるものか。ただ日本人のように政府からの援助をうけられないことは遺憾きわまりない」[14]と述べた。このことから見ても分かるように、中日両国の政策の対照的な帰結は、張謇の失敗と渋沢栄一の成功がただ両国の近代化が辿った異なった運命の縮図にすぎないことを示す。張謇が自分の不運を嘆いたのは自己の失敗の口実ではなく、彼の直面した社会の現実から生じた必然的なものであったのである。

(1) 土屋喬雄『渋沢栄一』、吉川弘文館平成元年版、一一二頁。
(2) 『青渊回顧録』上巻、青渊回顧録刊行会昭和二年版、第一八三頁。
(3) 渋沢秀雄『明治を耕す話』、青蛙房昭和五五年版、第一一九－一二〇頁。
(4) 『張謇全集』第六巻（日記）、江蘇古籍出版社一九九四年版、第三六二頁。
(5) 『張謇全集』第六巻（日記）、江蘇古籍出版社一九九四年版、第四九〇頁。
(6) 『張謇全集』第六巻（日記）、江蘇古籍出版社一九九四年版、第五一一頁。
(7) 『張謇全集』第一巻、江蘇古籍出版社一九九四年出版、第一〇三頁。
(8) 『論語と算盤』、国書刊行会、一九八五年版、第五七頁。
(9) 「代鄂督条陳立国自強疏」、『張謇全集』第一巻、第三八頁。
(10) 「大生紗廠股東会宣言書」、『張謇全集』第三巻、江蘇古籍出版社一九九四年版、第一一四頁。
(11) 『論語と算盤』、国書刊行会、一九八五年版、第一五六頁。
(12) 張孝若『南通張季直先生傳』、上海書店一九九一年影印版、第二七四頁。
(13) 「大生紗廠第二届説略並帳略」『張謇全集』第三巻、江蘇古籍出版社、一九九四年、四四頁。
(14) 『張謇全集』第一巻、江蘇古籍出版社、一九九四年版、五九九頁～六〇〇頁。

発表を終えて

今度の発表の前に、発表の内容はやや地味な、これまであまり注目されていなかった比較経営史分野の一つの問題であり、しかも日本語もそんなに流暢ではないので、聴衆の皆さんにどの程度の理解と共感をいただけるのか、私の心配する所でした。しかし、発表中、聴衆の皆さんに興味深く静聴していただいたばかりでなく、活発に質問してくださったことは予想外のことで、なにより嬉しく思っております。ここで、この機会を与えてくれた日文研と、発表の後に貴重なコメントを賜った所長の猪木武徳先生に対して、厚くお礼を申し上げたい。また、司会のパトリシア・フィスター教授ならびに研究協力課と編集など関係部門の皆様にも感謝の意を表します。

学問の「梁山泊」と言われる京都の国際日本文化研究センターで一年間の研究生活を送ることができるのは、私にとって非常に素晴らしい体験であり、諸先生方の熱心な探究精神と自由活発な学術雰囲気、そして美しい自然環境は私に忘れられない印象を残しました。これからも日文研との交流を長く続けていけるように期待しております。

周見

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
⑩1	9.11.11 (1997)	KIM Uchang 金 禹昌（高麗大学校文科大学教授・日文研客員教授） リヴィア・モネ Livia MONNET （モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員） カール・モスク Carl MOSK（ヴィクトリア大学教授・日文研客員教授） ヤン・シコラ Jan SYKORA（カレル大学助教授・日文研客員助教授） Kinya TSURUTA 鶴田 欣也 （ブリティッシュコロンビア大学教授・日文研客員教授） パネルディスカッション 「日本および日本人—外からのまなざし」
⑩2	9.12. 9	ジョナ・サルズ Jonah SALZ（龍谷大学助教授） 「猿から尼まで—狂言役者の修業」
103	10. 1.13 (1998)	KANG Shin-pyo 姜 信杓 （仁済大学校人文社会科学研究所教授・日文研客員教授） 「京都考見録：韓国文化人類学者の経験」
⑩4	10. 2.10	GAO Wenhan 高 文漢（山東大学教授・日文研客員教授） 「中世禅林の異端者—一休宗純とその文学」
105	10. 3. 3	シュテファン・カイザー Stefan KAISER（筑波大学教授） 「和魂漢才、和魂洋才—語彙・表記に見る日本文化の特性」
106	10. 4. 7	スミエ A. ジョーンズ Sumie A. JONES （インディアナ大学教授・日文研客員教授） 「幽霊と妖怪の江戸文学」
107	10. 5.19	リヴィア・モネ Livia MONNET （モントリオール大学準教授・日文研来訪研究員） 「映画と文学の間に—金井美恵子の小説における映画的身体」
⑩8	10. 6. 9	SHIMAZAKI Hiroshi 島崎 博（レスブリッジ大学教授・日文研客員教授） 「化粧の文化地理」

⑩⑨	10. 7.14 (1998)	Peipei QIU 丘　培培（バッサー大学助教授・日文研来訪研究員） 「なぜ荘子の胡蝶は俳諧の世界に飛ぶのか —詩的イメージとしての典故—」
110	10. 9. 8	ブルーノ・リーネル Bruno RHYNER（チューリッヒ大学講師・ユング派精神分析家・日文研客員助教授） 「日本の教育がかかえる問題点」
⑪⑪	10.10. 6	アハマド・ムハマド・ファトヒ・モスタファ Ahmed M. F. MOSTAFA （カイロ大学講師・日文研客員助教授） 「『愛玩』—安岡章太郎の『戦後』のはじまり」
⑪⑫	10.11.10	アリソン・　　トキタ Alison McQUEEN-TOKITA （モナシュ大学助教授・日文研客員助教授） 「『道行き』と日本文化—芸能を中心に」
113	10.12. 8	グレン・フック Glenn HOOK （シェフィールド大学教授・東京大学客員教授） 「地域主義の台頭と東アジアにおける日本の役割」
⑪⑭	11. 1.12 (1999)	DU Qin 杜　勤 （華東師範大学助教授・華東師範大学外国語学院 第２学部副学部長・日文研客員助教授） 「『中』のシンボリズムについて—宇宙論からのアプローチ」
115	11. 2. 9	シーラ・スミス Sheila SMITH （ボストン大学助教授・日文研客員助教授） 「日本の民主主義—沖縄からの挑戦」
⑪⑥	11. 3.16	エドウィン A. クランストン Edwin A. CRANSTON （ハーバード大学教授・日文研客員教授） 「うたの色々：翻訳は詩歌の詩化または死化？」
⑪⑦	11. 4.13	ウィリアム J. タイラー William J. TYLER （オハイオ州立大学助教授・日文研客員助教授） 「石川淳著『黄金傳説』その他の翻訳について」
⑪⑧	11. 5.11	KIM　Ji Kyun 金　知見（韓国・仏教教育大学大学院長・日文研客員教授） 「内藤湖南先生の眞蹟—高麗太祖顕陵詩」

119	11. 6. 8 (1999)	マリア・ヴォイヴォディッチ Marija VOJVODIC (モンテネグロ共和国政府民営化推進部外資担当課長・ 日文研客員助教授) 「言葉いろいろ—日本の言葉に反映された文化の特徴」
⑫⓪	11. 7.13	REECE Sachiko Taki リース・幸子　滝 (米国・ケドレン精神衛生センター箱庭療法トレーニングコンサルタント・日文研客員助教授) 「心理臨床の場に映った私生活の中の暴力と社会の中の暴力」
⑫①	11. 9. 7	SONG Min 宋　敏（韓国・国民大学校文化大学学長・日文研客員教授） 「明治初期における朝鮮修信使の日本見聞」
⑫②	11.10.12	ジャン・ノエル・A. ロベール Jean-Noël A. ROBERT (フランス・パリ国立高等研究院教授・日文研客員教授) 「二十一世紀の漢文—死語の将来—」
⑫③	11.11.16	ヴラディスラブ・ニカノロヴィッチ・ゴレグリャード Vladislav Nikanorovich GOREGLIAD (ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク 支部極東部長・日文研客員教授) 「鎖国時代のロシアにおける日本水夫たち」
⑫④	11.12.14	X. Jie YANG 楊　暁捷（カルガリー大学準教授・日文研客員助教授） 「鬼のいる光景—絵巻『長谷雄草紙』を読む—」
⑫⑤	12. 1.11 (2000)	エミリア・ガデレワ Emilia GADELEVA（日文研中核的研究機関研究員） 「年末・年始の聖なる夜 —西欧と日本の年末・年始の行事の比較的研究」
⑫⑥	12. 2. 8	LEE Eung Soo 李　応寿（世宗大学校副教授・日文研客員助教授） 「東アジア獅子舞の系譜—五色獅子を中心に—」
127	12. 3.14	アンナ・マリア・トレーンハルト Anna Maria THRÄNHARDT (デュッセルドルフ大学教授・日文研客員教授) 「皇室と日本赤十字社の始まり」
⑫⑧	12. 4.11	ペッカ・コルホネン Pekka KORHONEN (ユワスクラ大学教授・日文研客員助教授) 「アジアの西の境」

⑫⑨	12. 5. 9 (2000)	KIM Jeong Rye 金　貞禮（国立全南大学校副教授・日文研客員助教授） 「五・七・五、日本と韓国」
⑬⓪	12. 6.13	ケネス L. リチャード Kenneth L. RICHARD （県立長崎シーボルト大学教授・日文研客員教授） 「出島―長崎―日本―世界　憧憬の旅 サダキチ・ハルトマン（1867―1944）と倉場富三郎（1871―1945）」
131	12. 7.11	リュドミラ・ホロドヴィッチ Lyudmila HOLODOVICH （ソフィア大学助教授・日文研客員助教授） 「お盆と正教の五旬祭―比較的なアプローチ―」
⑬②	12. 9.12	マーク・メリ Mark MELI（日文研外来研究員） 「『物のあはれ』とは何なのか」
133	12.10.10	リチャード・ルビンジャー Richard RUBINGER （インディアナ大学教授・日文研客員教授） 「読み書きできなかったのは誰か―明治の日本」
⑬④	12.11.14	SHIN Yong-tae 辛　容泰 （東国大学校日本学研究所研究員・日文研客員教授） 「日本語の『カゲ（光・蔭）』外―日本文化のルーツを探る―」
135	12.12.12	CAI Dun da 蔡　敦達 （同済大学日本学研究所助教授・日文研客員助教授） 「中国文人が観た明治日本―旅行記を読む―」
⑬⑥	13. 2. 6 (2001)	バルト・ガーンズ Bart GAENS（日文研中核的研究機関研究員） 「長者の山―近世的経営の日欧比較―」
137	13. 3. 6	ポール・S. グローナー Paul S. GRONER （ヴァージニア大学教授・日文研客員教授） 「仏教の戒律とは何か？」
⑬⑧	13. 4.10	LI Zhuo 李　卓（南開大学教授・日文研客員教授） 「中日姓名の比較について―親族の血縁性と社会性―」
⑬⑨	13. 5. 8	エッケハルト・マイ Ekkehard MAY （フランクフルト大学教授・日文研客員教授） 「西洋における俳句の新しい受容へ」

⑭⓪	13. 6.12 (2001)	XU Subin 徐　蘇斌（日文研外国人研究員） 「中国現代建築の成立基盤―留日建築家・趙冬日と人民大会堂―」
141	13. 7.10	ヘンリー D. スミス Henry D. SMITH, Ⅱ （コロンビア大学教授　日文研外国人研究員） 「忠臣蔵再考―四十七士の三百年―」
⑭⓪	13. 9.18	ジョナサン M. オーガスティン Jonathan M. AUGUSTINE（日文研外来研究員） 「聖人伝、高僧伝と社会事業―古代日本、ヨーロッパの高僧を中心に―」
143	13.10. 9	アレクサンダー・ボビン Alexander VOVIN （ハワイ大学準教授・日文研客員助教授） 「日韓上代言語域：神と国と人と」
144	13.11.13	GUAN Wen Na 官　文娜（日文研外国人研究員） 「日本社会における『近親婚』と中国の『同姓不婚』との比較」
145	13.12.11	チグサ　キムラ　スティーブン Chigusa KIMURA-STEVEN （ニュージーランド・カンタベリー大学準教授・日文研外国人研究員） 「大庭みな子『三匹の蟹』：ミニスカート文化の中の女と男」
⑭⑥	14. 1.15 (2002)	SHIN Chang Ho 申　昌浩（日文研中核的研究機関研究員） 「親日仏教と韓国社会」
⑭⑦	14. 2.12	マシミリアーノ　トマシ Massimiliano TOMASI （ウェスタン ワシントン大学準教授・日文研外国人研究員） 「近代詩における擬声語について」
148	14. 3.12	JEONG Hye Kyeong 鄭　惠卿 （世宗大学校人文科学大学副教授・日文研外国人研究員） 「日韓言語文化の比較―語る文化と語らぬ文化―」
149	14. 4. 9	マッシュー　フィリップ　マッケルウェイ Matthew Philip McKELWAY （ニューヨーク大学助教授・日文研外国人研究員） 「初期洛中洛外図の人脈と武家作法―三条本を中心に―」

⑮⓪	14. 5.14 (2002)	LEE Kwang Joon 李　光濬 （東西心理学研究所所長・日文研外国人研究員） 「禅心理学的生命観」
⑮①	14. 6.11	LU Yi 魯　義 （中国・北京外国問題研究会教授・日文研外国人研究員） 「中日関係と相互理解」
152	14. 7. 9	アレクシア　ボ　ロ Alexia BORO （イタリア　カ・フォスカリ大学助手・日文研外国人研究員） 「建物と権力―明治初期の東京の建築について」
⑮③	14. 9.10	YEE Milim 李　美林 （日文研外国人研究員） 「近世後期『美人風俗図』の絵画的特徴―日韓比較―」
154	14.10. 8	マルクス　リュッターマン Markus RÜTTERMANN （日文研外国人研究員） 「伝授から伝統へ―中・近世日本における『啓蒙』の一面について」
⑮⑤	14.11. 5	KIM Moon Gil 金　文吉 （韓国・釜山外国語大学校教授・日文研外国人研究員） 「神代文字と日本キリスト教―国学運動と国字改良」
156	14.12.10	スーザン L. バーンズ Susan L. BURNS （米・シカゴ大学準教授・日文研外国人研究員） 「問題化された身体―明治時代における医学と文化」
157	15. 1.14 (2003)	デビット L. ハウエル David L. HOWELL （米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員） 「天保七年常州那珂湊敵討ち一件顚末」
158	15. 2.18	Zhan Xiaomei 戦　暁梅 （日文研研究機関研究員） 「隠逸山水に秘められた『近代』―富岡鉄斎を読む―」
159	15. 3.11	リチャード H. オカダ Richard H. OKADA （米・プリンストン大学準教授・日文研外国人研究員） 「『母国語』とは誰の言葉？：言語と国民国家」

⑯⓪	15. 4. 8 (2003)	ビル スウェル Bill SEWELL (カナダ・セントメアリー大学助教授・日文研外国人研究員) 「旧満州における戦前日本の町づくり活動」
161	15. 5.20	PARK JeonYull 朴　銓烈 (韓国中央大学校教授・日文研外国人研究員) 「神々の使者に扮装する愉しみ—門付け儀礼の演劇性をめぐって—」
162	15. 6.10	RHEEM YongTack 林　容澤 (韓国・仁荷大学校副教授・日文研外国人研究員) 「詩の翻訳は可能か—金素雲訳『朝鮮詩集』の場合—」
163	15. 7. 8	ボイカ エリト ツィゴバ Boyka Elit TSIGOVA (ブルガリア・ソフィア大学準教授・日文研外国人研究員) 「ブルガリア人の日本文化観—その理解と日本文芸作品の翻訳をめぐって—」
164	15. 9. 9	インゲ マリア ダニエルズ Inge Maria DANIELS (ロイヤル・カレッジ・オブ・アート客員講師・日文研外来研究員) 「現代住宅に見られる日本人と『モノ』の関わり方」
⑯⑤	15.10.14	WANG Cheng 王　成 (首都師範大学助教授・日文研外国人研究員) 「阿部知二が描いた“北京”」
⑯⑥	15.11.11	CHEN Hui 陳　暉 (中国社会科学院亜太日本研究所研究員教授・日文研外国人研究員) 「明治教育家　成瀬仁蔵のアジアへの影響－家族改革をめぐって－」
167	15.12. 9	エフゲーニー S. バクシェエフ Evgeny S. BAKSHEEV (国立ロシア文化研究所研究員・日文研外国人研究員) 「人と神とが出会う場所　沖縄県宮古諸島の聖地・拝所—その構造と形態を中心として—」
168	16. 4.13 (2004)	MIN Joosik 閔　周植 (韓国・嶺南大学校教授・日文研外国人研究員) 「風流の東アジア—美を生きる技法—」
⑯⑨	16. 5.11	コンスタンティン ノミコス ヴァポリス Constantine Nomikos VAPORIS (米国・メリーランド大学準教授・日文研外国人研究員) 「参勤交代と日本の文化」

⑰⓪	16. 6. 8 (2004)	WANG Shukun 王　述坤 (中国・東南大学教授・日文研外国人研究員) 「近代における日本、中国の文人・作家の自殺」
⑰①	16. 7.13	ヴィクター ヴィクトロヴィッチ リビン Victor Victorovich RYBIN (ロシア・サンクトペテルブルグ大学助教授・日文研外国人研究員) 「知られざる歌麿―『百千鳥狂歌合はせ』の詩的、文法的分析」
172	16. 9.14	スコット ノース Scott NORTH (大阪大学大学院人間科学研究科助教授) 「セールスマンの死 ： サービス残業・湾岸戦争・過労死」
173	16.10.19	SE Yin 色　音 (中国社会科学院民族研究所研究員 教授・日文研外国人研究員) 「シャーマニズムから見た〈日本的なるもの〉」
174	16.11. 9	LEE HanSop 李　漢燮 (韓国 高麗大学校日語日文学科教授・日文研外国人研究員) 「明治期の外国人留学生と文明開化」
175	16.12.14	アレクサンダー マーシャル ヴィーシー Alexander Marshall VESEY (米国 ストーンヒル大学助教授・日文研外国人研究員) 「近世村社会における仏教僧侶の村人との仲介役的役割」
176	17. 1.11 (2005)	ロイ アンソニー スターズ Roy Anthony STARRS (ニュージーランド オタゴ大学シニア・レクチャラー・日文研外国人研究員) 「国家主義者としての三島由紀夫―戦後の原点」
⑰⑦	17. 2. 8	マッツ アーネ カールソン Mats Arne KARLSSON (ストックホルム大学助教授・日文研外国人研究員) 「僕はこの暗合を無気味に思ひ… 芥川龍之介『歯車』、ストリンドベリ、そして狂気」
⑰⑧	17. 3. 8	WU Yongmei 呉　咏梅 (北京日本学研究センター専任講師・日文研外国人研究員) 「アジアにおけるメディア文化の交通― 中国人大学生が見た日本のテレビドラマをめぐって ―」
⑰⑨	17. 4.12	ノエル ジョン ピニングトン Noel John PINNINGTON (アリゾナ大学助教授・日文研外国人研究員) 「中世能楽論における『道』の概念―能役者が歩むべき『道』」

180	17. 5.10 (2005)	CHI Myong Kwan 池　明観 (日文研外国人研究員) 「韓国現代史と日本について—1973年から1988年まで—」
181	17. 6.14	イアン ジェームズ マクマレン Ian James MCMULLEN (オックスフォード大学ペンブロークカレッジ教授・日文研外国人研究員) 「徳川時代の孔子祭」
⑱②	17. 7.12	CHUNG Jae Jeong 鄭　在貞 (ソウル市立大学校教授・日文研外国人研究員) 「韓日につきまとう歴史の影とその克服のための試み」
183	17. 9.20	オギュスタン ベルク Augustin BERQUE (フランス国立社会科学高等研究院教授・日文研外国人研究員) 「日本の住まいにおける風土性と持続性」
184	17.10.11	NO Sung Hwan 魯　成煥 (蔚山大学校人文大学日本語日本学科教授・日文研究外来研究員) 「韓国から見た日本のお盆」
185	17.11.16	セルゲイ ラプチェフ Sergey LAPTEV (マクシム・ゴリキー文学学院助教授・日文研外国人研究員) 「考古学と文字－古代日本の漢字文化を中心に」
186	17.12.20	YOON Sang In 尹 相仁 (漢陽大学校国際文化大学日本言語文化学科教授・日文研外国人研究員) 「〈日流〉の水脈－なぜ韓国の若者は日本の現代小説に惹かれるのか」
187	18. 1.10 (2006)	アンドリュー ガーストル Andrew GERSTLE (ロンドン大学 SOAS 教授・日文研外国人研究員) 「女形の身体を描く－肉体表現と流光斎－」
188	18. 2.21	ウィリアム パック ブレッカー William Puck BRECHER (南カリフォルニア大学助手・日文研外来研究員) 「郊外の隠遁への憧れ－江戸時代の郊外における美学的スペース－」
189	18. 3.14	サーレ アーデル アミン SALEH Adel Amin (カイロ大学文学部日本語学科専任講師・日文研外国人研究員) 「『国語』という神話－日本とエジプトにおける言語の近代化をめぐって－」

⑲⓪	18. 4.18 (2006)	KIM Yongui 金　容儀 （全南大学校人文大学副教授・日文研外国人研究員） 「玄界灘を渡った鬼のイメージ－なぜ韓国のトケビは日本の鬼のイメージで語られるのか－」
191	18. 5.16	CHOI Park Kwang 崔　博光 （成均館大学校教授・日文研外国人研究員） 「京都と文化表象－18世紀朝鮮通信使の目から－」
192	18. 6.13	LIU Chun Ying 劉　春英 （東北師範大学助教授・日文研外国人研究員） 「『満州国』時代『新京』に於ける日本人作家」
⑲③	18. 7.11	ZHOU Wei Hong 周　維宏 （北京日本学研究センター教授・日文研外国人研究員） 「近代化による農村の変貌とその捉え方について－中日農村を比較して－」
⑲④	18. 9.19	ダリア　シュバンバリーテ Dalia ŠVAMBARYTĖ （リトアニア ビリニュス大学講師・日文研外国人研究員） 「オセアニアの島々のイメージ形成をめぐって」
⑲⑤	18.10.10	エドウィーナ　パーマー Edwina PALMER （カンタベリー大学教授・日文研外国人研究員） 「ニュージーランドの学生が学ぶ「日本」－高等教育の社会科カリキュラムを中心に－」
⑲⑥	18.11.14	ヨセフ　キブルツ Josef A. KYBURZ （フランス国立科学研究センター教授・日文研外国人研究員） 「お札（ふだ）が語る日本人の神仏信仰」
197	18.12.13	ロバート　エスキルドセン Robert ESKILDSEN （日文研外国人研究員） 「異国船物語―江戸後期に描かれた船―」
⑲⑧	19. 1.16 (2007)	プラット　アブラハム　ジョージ Pullattu Abraham GEORGE （ジャワハルラル ネルー大学日本語学科準教授・日文研外国人研究員） 「日印関係とインドにおける日本研究―宮沢賢治の菜食主義の思想―」
199	19. 2.13	スティリアノス　パパレクサンドロプロス Stylianos PAPALEXANDROPOULOS （アテネ大学神学部 準教授 日文研 外国人研究員） 「日本仏教論―その思想史的展開をめぐって―」

⑳⓪	19. 3.13 (2007)	LU Liu Di 陸　留弟 (華東師範大学外国語学院日本語学部教授・日文研外国人研究員) 「楽しみの茶と嗜みの茶—中国から見た茶の湯文化—」
⑳①	19. 4.18	モハメッド レザ サルカール アラニ Mohammad Reza SARKAR ARANI (アラメ タバタバイ大学教育学部(イラン)助教授・日文研外国人研究員) 「国境を越えた日本の学校文化」
202	19. 5.16	ZHANG ZheJun 張　哲俊 (北京師範大学文学院比較文学研究所教授・日文研外国人研究員) 「唐代文学における日本のイメージ」
⑳③	19. 6.13	チャワーリン サウェッタナン Chavalin SVETANANT (チュラーロンコーン大学専任講師・日文研外国人研究員) 「『気』の思想・『こころ』の文化—言語学からみた日本人とタイ人の心のあり方—」
⑳④	19. 7.25	シンシア ネリ ザヤス Cynthia Neri ZAYAS (フィリピン国立大学国際研究センター準教授・日文研外国人研究員) 「淡路島における災害と記憶の文化—荒神信仰を中心に—」
205	19. 9.11	チャン ティ チュン トアン TRAN Thi Chung Toan (ベトナム国立ハノイ国家大学助教授・日文研外国人研究員) 「宮本常一の民俗誌を通して見た日本女性と日本文化理解」
206	19.10.10	ベイ ヒョン イル PAI Hyung Il (カリフォルニア大学サンタバーバラ校準教授・日文研外国人研究員) 「朝鮮旅行案内書に見る日本人のロマン」
207	19.11.14	KIM YoungCheol 金　榮哲 (漢陽大学校日本言語文化学部教授・日文研外国人研究員) 「遊興の『花』としての理想—妓生と遊女—」
⑳⑧	19.12.12	WANG Weikun 王　維坤 (西北大学国際文化交流学院教授・副院長・日文研外国人研究員) 「中国出土の文物からみた中日古代文化交流史—和同開珎と井真成墓誌を中心として—」
209	20. 1.16 (2008)	ブライアン 小野坂 ルパート Brian Onozaka RUPPERT (イリノイ大学東アジア学科・宗教学科准教授・日文研外国人研究員) 「懺悔・供養・修法 —前近代日本仏教の心を探る—」

210	20. 2.26 (2008)	マイク　モラスキー Michael S. MOLASKY （ミネソタ大学准教授・日文研外国人研究員） 「関西のジャズ喫茶文化」
211	20. 3.18	ゲニラ　リンドバーグ　ワダ Gunilla LINDBERG-WADA （ストックホルム大学主任教授・日文研外国人研究員） 「北極から日本へ —スウェーデン探検隊が見た明治日本—」
㉑②	20. 4.23	ZHOU Jian 周　見 （中国社会科学院世界経済政治研究所教授・日文研外国人研究員） 「渋沢栄一と張謇 —日中近代企業家に関する一つの比較—」
213	20. 5.14	KIM Jeong Hae 金　貞恵 （釜山外国語大学校教授・日文研外国人研究員） 「小説を通してみたグローバル時代の在日コリアン」
214	20. 6.11	フレデリック　ジラール Frédéric GIRARD （フランス国立極東学院教授・日文研外国人研究員） 「ヨーロッパ人の日本宗教へのアプローチ—エミールギメと日本の僧侶神主との問答—」

○は報告書既刊

なお、報告書の全文をホームページで見ることが出来ます。

＊＊＊＊＊＊＊

発 行 日　2008年７月15日
編集発行　国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話（075）335-2048
ホームページ：http://www.nichibun.ac.jp

＊＊＊＊＊＊＊
©2008　国際日本文化研究センター

■ 日時

2008年４月23日（水）

午後２時～４時30分

■ 会場

キャンパスプラザ京都

第二二回　渋沢栄一と張謇

周　見

国際日本文化研究センター